
ヘブンズゲート

blurd

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘブンズゲート

【Nコード】

N9712T

【作者名】

blurd

【あらすじ】

『世界』というのは、二つの世界に分かれている。

『現世』と『来世』

『現世』は生命が活動している世界。

『来世』は『現世』で一度死んだ生命が活動する世界。

二つの世界はたがいに一定の距離を保って存在している。一定の距離を保っているからこそ、一度行った世界には、二度と戻ることができない。一つだけ戻る手があるとすれば、『死』しかない。（この小説は僕のHPにも載せてあります）

（前書き）

昔に投稿した小説です。連載から短編にしました。

『来世』にはいくつかの次元がある。

『テンゴク』『ジゴク』『レンゴク』

テンゴクに住んでいるスカイという少年は、親友であるダイヤにさそわれ、天国にある遊園地『ヘブンズランド』に向かった。

「いったい、なんでこんなところに行きたくなっただ？」

スカイは、ダイヤと合流するとさっそくその疑問をたずねた。

「だってよく。テンゴクってヒマすぎるじゃん。だからヒマつぶしに……な」

ダイヤは両腕を頭に交差し、だるそうに答える。

「じゃあなんで、オレをさそっただ？ヒマつぶしなら一人で行けばいいじゃないか」

「だれが入場料はらうんだよ」

「オレがはらうのかよ！」

「いいじゃん。オレ、いま金欠だから金がないんだよ。あとでかえすからさ」

「お前……そう言っただけのためし無いからな」

スカイは、横目ダイヤを見る。

「ま……いつか」

そう言っただけスカイはダイヤの入場料まではらった。

「お、ここだ、ここだ」

遊園地内を何分かまわり、見つけた大きなジェットコースターをダイヤが指差す。

「しょっぱなからジェットコースターかよ」

スカイが愚痴をこぼす。その姿をダイヤは見逃さずに

「いいじゃないか。ヒマな気分を吹き飛ばせ！！てきな感じで」

と、大きくジャンプした。

しかし、それがあだとなつたのか、着地に失敗したダイヤはスカイをまきこみ別のアトラクション場所へ転んでしまった。

「痛たたたた」

「なにやってるんだよダイヤ。オレまで巻き込みやがって」

スカイが痛そうに頭をおさえる。

と、その時スカイとダイヤは妙な気配にふりむいた。そこには、とてつもなく大きい円い光が浮かんでいた。

「オーウ、ハジメマーシテ」

「うわっ！」

いつのまに居たのか、二人の前には人が立っていた。

「ワタクシ、ヘブンスゲートノ責任者、^{セキーンシャ}『レモール』トモウシマス」

「ヘブンスゲート？」

スカイとダイヤは、ほぼ同時に言った。

「ハイ、ココニアル円イヒカリハ『ヘブンスゲート』ノ、スタート地点デス。コノ中ニアル、試練ヲミゴト突破スルト、ナント生き返ルコトガ、デキルノデース」

妙に芝居がかかったようにしゃべっている。

「アナタたちモ、ヘブンスゲートヲクグリ、シレンヲコエテ、イキカエリニキタノデショ？デハ、イツテラッシャイマセー」

「え？ちよつと待つてください。試練とかよくわかんないし、好きで入ったわけじゃないって、うわあ！」

スカイの話などお構いなしにレモールはスカイとダイヤを押してヘブンスゲートの中へ引きずり込んだ。

「うわあああ……！」

「ん……どこだ、ここ」

スカイが目覚めるとダイヤはすでに起きていた。

「やっと起きたか……」

「おお、ダイヤか。てかどこだ、ここ」

「ヘブンスゲートの中だそうだが」

ダイヤの言葉にスカイは周りを見ると、そこはとても美しい場所だった。

「ここがヘブンスゲートの中……」

スカイがつぶやくとダイヤは

「ん、なんだあれ、行ってみようぜ」

と、遠くにある看板を指差した。

看板をみるとそこには、こう書いてあった。

試練、敵を倒せ！

「……何だこれ？」

ダイヤが不思議そうに言う。

「これがレモールさんの言っていた試練じゃないのか。ほらここに試練って書いてある」

スカイが看板の上部を指差す。

「って事はこの試練、つまり敵を倒せば生き返ることができるのか！」

ダイヤがなぜかガッツポーズをする。

「でも……敵ってなんだよ」

スカイがあごに手をおさえて考え込む。

「後ろにいる奴じゃねえのか？」

「は？」

ダイヤの言葉に、スカイがおそろおそろ後ろを見る。

そこには……

「グルルル……！」

四本の足に加え、背中には二つの大きな翼をはやしているモンスター、『ドラゴン』がいた。

「ゴアアア！」

突如ドラゴンが大きな巨体を身構え、二人にめがけ突っ込んできた。

「うわっ！来るぞ！」

スカイの声に、二人は、ほぼ同時に跳び出した。何メートルか滑り込み、その巨体を見上げたスカイは思わず言葉を失った。ズルリと垂れ下がった尻尾しっぽに、三メートルはある巨体。それに加え、どんな物でも噛み砕けそうな強靱きょうじんなあごにスカイは肝を冷やした。

「こいつと戦えていうのかよ……。せめてなにか武器があれば……」

スカイがつぶやくと、目の前に剣が二つ出現した。

「都合がいい試練だな」

ダイヤは剣の一つを取ると、ドラゴンの元へと突っ込んでいった。「ばか、ダイヤ！ 考えも無しに突っ込むな！！」

スカイが呼びかけるが、時はすでに遅し、ダイヤとドラゴンの距離きりは十メートル以下になっていた。

ドラゴンは、ダイヤの姿を確認すると、口を大きく開けながら首を持ち上げ、いつきに振り下ろした。

ダイヤはそれを、間一髪かんいっぱつによけ、無防備の足へと斬りかかった。パツと赤い塗料が宙を舞った。

ドラゴンは叫び声をあげ、その大きなしっぽをダイヤにむけて振りまわした。

「しまっ……」

不意をつかれたダイヤはその場に立ちすくみ動けなかった。このときの秒数一秒。いままさに、しっぽがダイヤを叩き飛ばすその時、一つの影がしっぽを斬り落とした。剣を持ったスカイだ。

「ばかやろう。いつきに突っ込みやがって。オレがいなきややられてたぞ」

「悪い、助かった」

ダイヤが手をあげる。

ドラゴンを大切なしっぽを失い、完全に理性が無くなり二人のもとへ、突っ込んできた。

「ワンパターンなやつだな」

ダイヤは、つぶやき華麗によける。そして持っていた剣をドラゴ

ンの足へ突き刺す。地上と剣にロックされドラゴンは動けずにいた。
「いまだ、スカイ！」

「ナイス、ダイヤ！」

スカイはドラゴンの頭上までジャンプし、いつきに斬りつけた。
ドラゴンは力なく倒れ、やがて光の粒へとかわり、空へ吸い込まれていった。

「これで……試練をクリアしたのか？」

スカイがつぶやく。その時、ゴゴゴゴゴという音とともに円い光が地中から出現した。

「この中に入れば……」

ダイヤがゴクツとつばを飲む。

「生き返ることができるんだな」

「いくぞ！」

スカイの合図とともに二人は光の中に入った。

「うわああああ……」

「オメデトウゴザイマース。アナタハコノゲームヲ、クリアシマシタ」

「……は？」

二人はほぼ同時に言った。

「アレ？知ラナカタノデスカ？コレハアトラクションデスヨ」

「ええええええ！！」

再び同時にさけぶ。

「じゃ、じゃああのヘブンスゲートは？」

スカイがたずねる。

「アレは立体映像デス。」

「ええええええ！！」

「オツカレサマデシター」

「まったく、ダイヤのせいで余計な時間がかかったじゃないか」

「まあいいじゃないか。意外と楽しかったし」

本当に楽しそうなダイヤを見てスカイは、

「ま、いっか」

さっさとジェットコースターがある場所へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9712t/>

ヘブンズゲート

2011年8月27日03時26分発行